

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02412

研究課題名(和文) 西アジアにおける農耕化・都市化プロセスの研究

研究課題名(英文) A Study of Neolithization and Urbanization in West Asia

研究代表者

常木 晃 (Tsuneki, Akira)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：70192648

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者は30年以上にわたる西アジアでの調査成果に基づいて、従来の定説とは異なる次のような農耕化・都市化プロセスを提示してきました。1. 西アジアでは、後氷期の環境適応として肥沃な三日月地帯で単純な天水農耕に基づいて農耕化が生じたのではなく、天水農耕と湧水農耕を組み合わせた複雑な農耕が初めから指向されていた。2. 紀元前4千年紀後半の南メソポタミアでの灌漑農耕に基づく都市化に先立って、紀元前8-7千年紀の北シリア地域で、灌漑と乾地農耕を組み合わせた農耕に基づいて社会の複雑化と大型化が進行し、その中で都市文明の基盤が形成された。本研究ではこれらの仮説の根拠となる遺跡の調査、報告を行いました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地球上で最も早く農耕が始まり都市社会が形成されたのが西アジアです。本研究では研究代表者が直接調査や研究に携わってきたシリア、イラン、イラクに所在する遺跡の調査研究を進めて遺跡調査報告を出版し、肥沃な三日月地帯東西での新石器化と都市化についての新たな仮説の根拠となる資料を具体的に提示、報告しました。現代社会は食糧生産経済と都市文明に大きく依存しています。なぜ人類は食糧生産を始め、都市文明を形成していったのか探究することは、階層化や環境破壊など現代文明の様々な矛盾の始まりを追究する原点となるのです。

研究成果の概要(英文)：Based on the evidence acquired by more than 30 years of archeological investigations, I proposed new hypotheses that are different from the conventional established theory for Neolithization and urbanization. 1) The original farming was not simple rainwater farming as an environmental adaptation of the postglacial period along the hilly franks of the Fertile Crescent. This complicated farming combined rainwater and spring-water farming and was explored from the beginning. 2) In the conventional theory, urbanization occurred for the first time in southern Mesopotamia based on irrigation farming during the later half of the 4th millennium B.C. However, new evidence indicates that social complexity and upsizing progressed based on dry and irrigation farming in the Levant, especially in northwestern Syria, during the 8th and 7th millennia B.C., which prepared a foundation for urbanization. In this study, I like to summarize our own results, which became the grounds for these hypotheses.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：新石器化 農耕化 都市化 文明 テル・エル・ケルク タベ・サンギ・チャハマック カラート・サイド・アハマダン ジャルモ

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

西アジア地域は、人類史の中の数多くの重要な転換を他地域に先駆けて達成してきました。中でも農耕開始から都市文明発展までの歴史プロセスは、現代文明社会まで引き続く様々な技術や社会制度（食糧生産・冶金術・都市生活・文字など）の原像を準備した極めて重大かつ大きな人類史上の大転換点となっています。

農耕化（新石器化）について：西アジアでの農耕のはじまりは従来考えられていたよりも長期間にわたるプロセスであったことが明らかにされつつありますが（Tanno and Willcox 2006, How fast was wild wheat domesticated, *Science* vol.311 no.5769）、この転換が他地域より先行して西アジアでおこった事実は、近年の汎世界的研究からも再確認されています（Larson et al. 2014 Current perspectives and the future of domestication studies, *PNAS* vol.111 no.17）。西アジアの中でこの転換が起こった主要舞台の候補は、1970年代までの所謂肥沃な三日月地帯から1980年代のレヴァント回廊、1990年代の黄金の三角地帯へと、調査の進展により変遷してきました（右図）。研究代表者は1996年以来、研究の空白地帯となっていたレヴァント北部（テル・エル・ケルク遺跡）、肥沃な三日月地帯東部（カラート・サイド・アハマダン遺跡）、ザグロス南部（タンギ・ボラギ遺跡群、アルサンジャン遺跡群）において旧石器時代終末～後期新石器時代の各遺跡の発掘調査を実施し、それぞれの地域が独自の農耕化プロセスを歩んできた証拠を提示してきました。また1970年代に東京教育大学により実施された北東イラン最古の新石器時代遺跡であるタペ・サンギ・チャハマック遺跡の調査成果を再整理し、西アジアから中央アジアへの農耕文化拡散の様相について指し示してきました。



都市文明の発展について：西アジアでの都市文明に関しては、従来の定説では紀元前4千年紀後半に南メソポタミアで都市化が起こったと考えられてきました。しかしながら、2000年代に入り、北メソポタミアに当たるシリア北東部においてそれよりも古く紀元前5千年紀末には都市化が進行していたという新たな仮説が提唱されるようになりました（Oates et al. 2007 Early Mesopotamian urbanism: a new view from the north, *Antiquity* 81）。また、さらにそれよりも3000年ほどさかのぼる先土器新石器時代B後期のレヴァント地域の南北では、各地にメガサイトと呼ばれる10haを超える集落が登場しています。研究代表者らはこれらメガサイトの中でも最大規模を誇るシリア北西部のイドリブ地域に所在するテル・エル・ケルク遺跡の調査を行い、同遺跡の紀元前8千年紀末～7千年紀の集落が16ha～8haと巨大な規模を誇っていただけでなく、高度な工芸技術を保持し、共同貯蔵施設や共同墓地を運営し、物資の体系的な管理、長距離交易や様々な儀礼行為を行っていた、相当程度複雑化した社会であることを明らかにしてきました（ex. Tsuneki, A. 2013 Another image of complexity: the case of Tell el-Kerkh, in *Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. ex orient:188-204）。このような証拠から、都市化は紀元前4千年紀に南メソポタミアで突然生じたのではなく、紀元前7千年紀から既にレヴァントでその胎動が見られ、3000年以上かけて北メソポタミアから南メソポタミアへと中心を移しながら徐々に進行していったプロセスであるという仮説を立てています（ex.常木晃 2014「都市文明へ」『西アジア文明学への招待』158-173）。また他地域では各々多様な都市化現象が起こっていたと考えていました。

2. 研究の目的

本研究では、研究代表者が直接調査や研究に携わってきた、シリアのテル・エル・ケルク遺跡、イランのタペ・サンギ・チャハマック遺跡、イラクのカラート・サイド・アハマダン遺跡などの調査成果及び出土遺物の整理研究をさらに進めてこれらの遺跡の発掘報告を作成し、前項で述べてきたような、肥沃な三日月地帯東西での新石器化と都市化についての新仮説の根拠となる証拠を具体的に提示することを目的としました。これらの報告書を編んでいく過程で、農耕の始まりから都市的集落編成までの歴史プロセスに含まれる重要な人類史上の転換点について、従来の定説とは異なる新たな視点から整理して証拠を提示することを目指しました。当初提示をめざした主な証拠は、地域ごとに以下のように整理できます。

・テル・エル・ケルク遺跡の整理研究から提示できる証拠

- 1) 従来農耕開始が他地域よりも遅れるとされた北西シリアにおいて、ユーフラテス中流域や南東アナトリアとほぼ同時期の先土器新石器時代B前期に、農耕化への取り組みが起こっていたこと（テル・エル・ケルク遺跡北西区の発掘調査）。
- 2) 先土器新石器時代B後期から土器新石器時代初頭にかけて、後代の小都市遺跡に匹敵する16haにもなる規模の集落が形成されていたこと。そしてその集落は経済的格差の少ないヘラルキー的な社会組織と複雑な儀礼によって運営されていたこと（テル・エル・ケルク遺跡中央区の発掘調査）。そのことが新たな都市化過程開始仮説の重大な証拠となります。
- 3) 土器新石器時代半ばに大規模な屋外型共同墓地が西アジアのみならず世界で最も早く成立しており、それ以後の葬送儀礼の規範となっていくこと。

・タペ・サンギ・チャハマック遺跡の再整理研究から提示できる証拠

- 1) 北東イランで最古の農耕村落であること（筑波大学に収蔵されているチャハマック遺跡西丘出土遺物の研究や、考古植物学的研究、¹⁴C年代測定などによる）。
- 2) ザグロス方面からの移住により北東イランの農耕村落が成立し、それが中央アジア方面に拡散していったこと（チャハマック遺跡東丘の建物址や出土遺物の再検討による）。

・カラート・サイド・アハマダン遺跡の調査研究から提示できる証拠

- 1) 政治的状況から長期にわたり農耕化研究の空白地帯となっていた肥沃な三日月地帯東翼にあたるイラク・クルディスタン地域において、少なくとも紀元前8千年紀に遡る先土器新石器時代の明確な農耕の証拠が得られたこと（2014-15年度調査成果）。
- 2) 初期農耕村落から土器新石器時代のハッスーナ期、サマッラ期、ハラフ期へと続く連続的な集落変遷を追跡でき、サマッラ文化やハラフ文化の起源問題に新証拠を提示できる可能性があること（2015年度調査結果の整理研究による）。

3. 研究の方法

これまで研究代表者が実施してきたシリア、イラン、イラクでの現地調査には多様な分野の研究者が参加し、共同研究を行ってきました。これら多様な分野の研究者の研究成果をとりまとめて、シリアのテル・エル・ケルク遺跡、イランのタペ・サンギ・チャハマック遺跡、イラクのカラート・サイド・アハマダン遺跡などの発掘報告を出版し、西アジアにおける農耕化・都市化についての従来の定説に対して新たな仮説を提示するための証拠を具体的に提示することに努めました。本研究の目的はあくまでもこれまで申請者が行ってきた西アジア各地の調査成果の総合であり、現地調査成果の整理・研究を強力に促進して、成果物として世に問うことでした。

そのために、これまで申請者が主導してきた遺跡調査に参加した様々な分野の研究者（考古学、古環境学、動物考古学、古植物学、形質人類学、地質学、年代学、GIS研究、アイソトープ研究など）の研究成果を取りまとめることが最も喫緊で重要な課題となりました。例えば新石器時代社会の実態を報告書で科学的再現していくためには、人骨のアイソトープ研究などによって、親族関係や食性などを明らかにすることが大きな力となりました。新石器時代や銅石器時代の人々の行動パターンを推定するためには、考古学研究成果を古環境学やGIS研究による遺跡周辺の地形や環境の復元の中に落とし込み、両者を融合する作業が必要不可欠でした。

また、一部研究が不十分な分野については、補足の現地調査を実施し、提示した仮説を補強するための証拠を収集する必要も残されていました。とくに、カラート・サイド・アハマダンの所在する肥沃な三日月地帯東部ザグロス地域の新石器化の研究状況は政治的な影響により大変遅れてしまっています。新石器化が起こる以前の旧石器時代終末から新石器化が起こっていく新石器時代初頭への考古学的シークエンスすら十分に復元できていません。そのためにイラク・クルディスタンのスレイマニア地域での補足現地調査をおこなって、ザグロス地域新石器化を再考する証拠を収集しました。

4. 研究成果

上記した研究目的ごとに、以下のような研究成果を得ることができました。

テル・エル・ケルク遺跡の整理研究

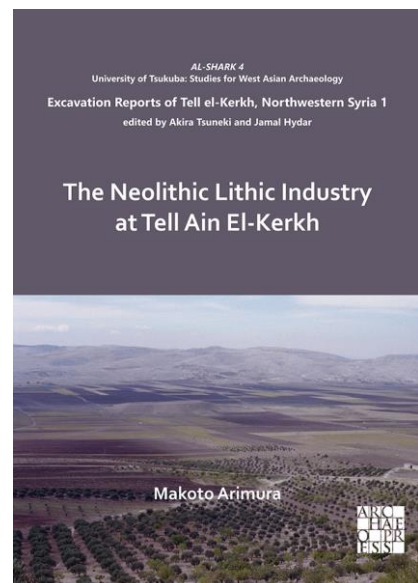
テル・エル・ケルク遺跡最終報告書1 *Excavation Report of Tell el-Kerkh, Northwestern Syria 1, The Neolithic Lithic Industry at Tell Ain El-Kerkh* (Arimura 2020) 388頁、ISBN 9781789694567を

英国Archaeopress社から出版しました。本書は、ケルク遺跡の石器研究ですが、同時に北西シリアの新石器化を扱っており、上記研究目的のテル・エル・ケルク遺跡の項の1) 北西シリアでは先土器新石器時代B前期に既に農耕化への取り組みが始まっていたことなどを実証するものです。また、現在同シリーズ2 *Kerkh Neolithic Cemetery* (Tsuneki et al. in press)を製作中で、上記研究目的ケルク遺跡の項 3) に示したように、西アジアでも最古の屋外型墓地の成立とその背景が本書で提示実証

されます。ケルク新石器墓地については、アイソトープ研究に基づいて、親族ごとに少しずつ異なる食事が新石器時代の食卓に上っていたことも明らかにされています (Itahashi et al. 2018)。また同研究目的ケルク遺跡の項 2) については、常木2020 (西アジア新石器時代のメガサイト再考『西アジア考古学』21: 83-94) などで議論し、深化されています。

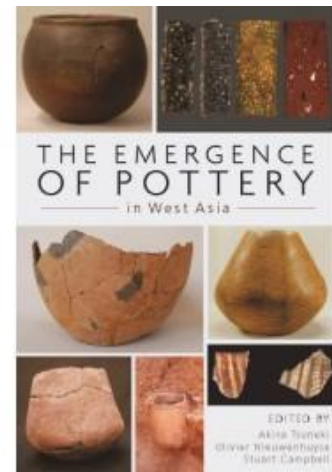
タペ・サンギ・チャハマック遺跡の再整理

1970年代に発掘された遺構・遺物の図面や写真の整理・研究を進め、土器や黒曜石製石器、人骨・動物骨に対する自然科学的研究 (SEMによる焼成温度推定やpXRFによる産地同定、小児人骨の詳細死亡年齢推定など) を実施するとともに、研究報告書用にこれまで整



Tell el-Kerkh 最終報告書 vol. 1

理した資料の資料化を終了しました。遺跡に関しては、Tsuneki 2020 (Tappeh Sang-e Chakhmaq, in *Archaeological Research and Preservation of Cultural Heritage in Iran*: 30-36), 出土土器に関しては英国 Oxbow Books 社から出版したTsuneki 2017で詳しく報告しました。上記した研究目的タペ・サンギ・チャハマック項1), 2)について、タペ・サンギ・チャハマック遺跡がイラン高原北東部で最も古い農耕遺跡であり、西アジアからトランと呼ばれる中央アジア方面へ農耕を伝播させた最も重要な集落の一つであることが、改めて実証されています。

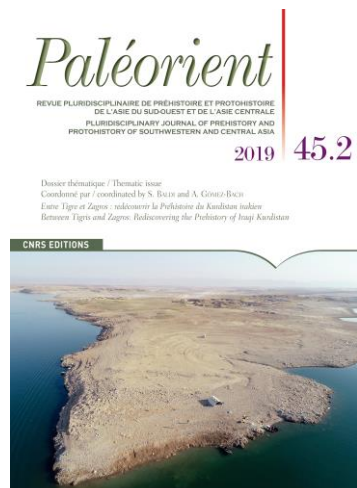


タペ・サンギ・チャハマック出土土器が詳しく議論されている書籍

The Emergence of pottery in West Asia

カラート・サイド・アハマダン遺跡の調査研究

2014-15年度に発掘調査を実施したカラート・サイド・アハマダン遺跡の整理研究をイラク・クルディスタンのスレイマニア文化財局において実施するとともに、ザグロス地域の新石器化研究深化ため、スレイマニア地方チャムチャマル地区に所在するトゥルカカ遺跡（2017年度）、ジャルモ（チャルモ）遺跡（2018-2019年度）で現地調査を実施しました。スレイマニア文化財局と密接に協力し、発掘調査した遺物の整理研究、補足調査、比較研究も実施しています。また、出土した遺物サンプルと出土炭化物をスレイマニア文化財局の許可を得て日本に持ち帰り、年代測定や産地同定を進めました。これらの遺跡調査の成果は、ミュンヘン大学で開催された第11回 ICAANE（古代中近東国際会議）で研究発表を行うとともに、研究論文（Tsuneki 2019 *Revisiting the Turkaka site in Slemani, Iraqi-Kurdistan*; Tsuneki et al. 2019 *Landscape and early farming at Neolithic sites in Slemani, Iraqi-Kurdistan*）として公表しています。チャムチャマル地区の補足調査では、特に地質学、古環境学、GIS研究と連携して、なぜ初期新石器時代の遺跡がこの地区に営まれているのかに関して、つまりザグロス東部での新石器化についての新たな仮説を提示することができました。これまで、チャムチャマル地区のジャルモ遺跡やカリム・シャヒル遺跡の調査に基づいて、シカゴ大学の故ロバート・ブレイドウッドは天水農耕による核地帯仮説でザグロス地域の新石器化を説明し、この核地帯仮説が長い間流布してきました。この従来の古い仮説に対して、最新の理化学的調査成果に基づいて私たちが提示したのが、ケスタ地形の湧水を利用した帯水農耕と丘陵部の天水農耕を組み合わせた農耕化です。もちろんこの仮説は、さらなる考古学調査の進展により検証されていかなければなりません、イラク・クルディスタンの先史時代を特集したPaléorient最新号に掲載され、すでに何人もの研究者から問い合わせを受けています。



私たちのジャルモ遺跡とカラート・サイド・アハマダン遺跡の研究結果が掲載された Paléorient 最新号

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Tsuneki, A., Rasheed, K., Watanabe, N., Anma, R. Tatsumi, Y. and Minami, M.	4. 巻 45/2
2. 論文標題 Landscape and early farming at Neolithic sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: A case study of Jarmo and Qalat Said Ahmadan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Paleorient	6. 最初と最後の頁 33-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tsuneki, A.	4. 巻 単独
2. 論文標題 From farming societies to urban civilization: A case of ancient West Asia	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Fortification and Urbanization: The First Dialogue between Ancient Civilizations,	6. 最初と最後の頁 29-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 常木 晃	4. 巻 21
2. 論文標題 西アジア新石器時代のメガサイト再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西アジア考古学	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 常木晃、渡部展也、安間了、辰巳祐樹、サリ・ジャンモ、ラワ・カリム・サリ	4. 巻 27
2. 論文標題 肥沃な三日月地帯東部の新石器化 イラク・クルディスタン、スレマニ地域チャルモ遺跡の調査 (2019年) -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第27回西アジア発掘調査報告会報告集(令和元年度考古学が語る古代オリエント)	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tsuneki, Akira	4. 巻 単独
2. 論文標題 Tappeh Sang-e Chakhmaq, Arsanjan, Tang-e Bolaghi	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Archaeological Research and Preservation of Cultural Heritage in Iran	6. 最初と最後の頁 30-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 常木晃	4. 巻 単独
2. 論文標題 サンギ・チャハマックとアルサンジャン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イラン文明を守る 日本とイランの協力の足跡	6. 最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 常木晃	4. 巻 2
2. 論文標題 象徴の容器としての土器と石製容器 テル・エル・ケルクの事例に基づいて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2 研究成果報告2019年度	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 常木晃	4. 巻 763
2. 論文標題 戦乱の中の文化財の保存・活用 イドリブ博物館のこと	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Itahashi Yu, Tsuneki Akira, Dougherty Sean P., Chikaraishi Yoshito, Ohkouchi Naohiko, Yoneda Minoru	4. 巻 17
2. 論文標題 Dining together: Reconstruction of Neolithic food consumption based on the 15N values for individual amino acids at Tell el-Kerkh, northern Levant	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Science: Reports	6. 最初と最後の頁 775 ~ 784
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1016/j.jasrep.2017.12.042	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Tsuneki, A	4. 巻 なし
2. 論文標題 Revisiting the Turkaka Site in Slemani, Iraqi-Kurdistan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Decades in Deserts, Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii	6. 最初と最後の頁 243-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuneki, A.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Symposium: Saving the cultural heritage for the next generation; Opening remarks	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation: Palmyra, A Message from Nara	6. 最初と最後の頁 111-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuneki, A.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Tell el-Kerkh, A Neolithic mega site in the province of Idlib	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Archaeological Explorations in Syria 2000-2011, Proceedings of ISCACH-Beirut 2015	6. 最初と最後の頁 267-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 常木晃・渡部展也・安間了・西山伸一・ラウ・カリム・サリ	4. 巻 第25回
2. 論文標題 肥沃な三日月地帯東部の新石器化 イラク・クルディスタン、スレマニ地域チャルモ遺跡・トゥルカカ遺跡の調査(2017年) -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 8 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 常木晃	4. 巻 141
2. 論文標題 西アジア考古学の現在地	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 17 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 常木晃	4. 巻 703
2. 論文標題 イラク・クルディスタンの考古学事情	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月間考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 25 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuneki, A.	4. 巻 38
2. 論文標題 The burial of Neolithic blade producer	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Al-Rafidan	6. 最初と最後の頁 39 - 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 常木晃
2. 発表標題 新石器時代のメガサイトとしてのテル・エル・ケルク遺跡
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第24回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 常木晃・渡部展也
2. 発表標題 危機にあるシリア文化遺産の記録
3. 学会等名 古代オリエント博物館友の会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 常木晃
2. 発表標題 西アジアにおける初期の印章と封泥
3. 学会等名 科学研究費補助金新学術領域研究『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究』計画研究01「西アジア先史時代における生業と社会構造」第8回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tsuneki, A.
2. 発表標題 From farming societies to urban civilization: A case of ancient West Asia
3. 学会等名 Fortification and Urbanization: The First Dialogue between Ancient Civilizations, 壇国大学校（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tsuneki, A.
2. 発表標題 Containers for spirit: a view from Tell el-Kerkh
3. 学会等名 Thinking Inside The Box: Containers in Neolithic Western Asia, Free University of Berlin (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tsuneki, A
2. 発表標題 Difference in occupation and violence by gender in the Kerkh Neolithic society, northwestern Syria
3. 学会等名 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 常木 晃
2. 発表標題 肥沃な三日月地帯東部の新石器化 イラク・クルディスタン、スレマニ地域チャルモ遺跡の調査 (2018年) -
3. 学会等名 第26回西アジア発掘調査報告会 (日本西アジア考古学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tsuneki, A.
2. 発表標題 Importance of the Near Eastern archaeology
3. 学会等名 Three days' workshop Importance of the Near Eastern Archaeology for the Next Generation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 常木晃・渡部展也・安間了・西山伸一・ラウ・カリム・サリ
2. 発表標題 肥沃な三日月地帯東部の新石器化 イラク・クルディスタン、スレマニ地域チャルモ遺跡・トゥルカカ遺跡の調査（2017年） -
3. 学会等名 日本西アジア考古学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsuneki, A.
2. 発表標題 Syria in prehistory
3. 学会等名 UNDP The Silk Road Friendship Project (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsuneki, A.
2. 発表標題 General introduction for the archaeology of Syria
3. 学会等名 Three days' workshop Syrian History and Archaeology for the Next Generation (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 常木 晃
2. 発表標題 シリア内戦下の文化遺産保護に関する国際協力
3. 学会等名 東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 常木晃、五十嵐あゆみ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 悠書館	5. 総ページ数 222
3. 書名 まんがで読む 文明の起源 シリアの先史時代	

1. 著者名 Tsuneki, A., Ikarashi, A. and Jammo, S.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Research Center for West Asian Civilization, University of Tsukuba	5. 総ページ数 222
3. 書名 Nash 'at al-Hadarat Suriat fi Eusur ma Qabil al Tarifi.	

1. 著者名 Tsuneki, A., Watanabe, N, and Jammo, S.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Research Center for West Asian Civilization, University of Tsukuba	5. 総ページ数 27
3. 書名 Kirkbizeh: A Series of Photogrammetry for Protection of Syrian Cultural Heritage, Ancient Villages of Northern Syria Vol. 4	

1. 著者名 常木晃、渡部展也、サリ・ジャンモ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑波大学西アジア文明研究センター	5. 総ページ数 21
3. 書名 危機にあるシリア文化遺産の記録	

1. 著者名 Arimura, M.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Archaeopress	5. 総ページ数 388
3. 書名 The Neolithic Lithic Industry at Tell Ain El-Kerkh	

1. 著者名 Tsuneki, A., Watanabe, N. and Jammo, S.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 University of Tsukuba, Tsukuba	5. 総ページ数 27
3. 書名 Serjilla: A Series of Photogrammetry for Protection of Syrian Cultural Heritage, Ancient Villages of Northern Syria Vol. 3	

1. 著者名 Tsuneki, A.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 University of Tsukuba, Tsukuba	5. 総ページ数 16
3. 書名 Ahmiyatu al-Athar Alsurieti fi Tarihi al-Alami Suria fi Asour ma Qabul al-Tarih.	

1. 著者名 久田健一郎・常木晃・荒井章司・鎌田祥仁	4. 発行年 2018年
2. 出版社 愛智出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 アフリカを脱出した人類最初の奇跡 西アジア・ザグロスの考古地質学	

1. 著者名 安倍 雅史、西藤 清秀、間舎 裕生、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所、奈良文化財研究所、文化財研究所奈良文化財研究所、文化財研究所東京文化財研究所、東京文化財研究所	4. 発行年 2017年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 202
3. 書名 世界遺産バルミラ破壊の現場から	

1. 著者名 常木晃・西秋良宏・山内和也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 118
3. 書名 季刊考古学第141号西アジア考古学・最新研究の動向	

1. 著者名 アジア考古学四学会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 330
3. 書名 農耕の起源と拡散	

1. 著者名 Tsuneki, A. Nieuwenhuys, O. and Campbell, S.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Oxbow Books	5. 総ページ数 196
3. 書名 The Emergence of Pottery in West Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

西アジア文明研究センター
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/>
 シリア・アラブ共和国における文化遺産保護国際貢献事業
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/bunka/>
 国際研究拠点としての「西アジア文明研究センター」の確立
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/>
 現代文明の基層としての古代西アジア文明 文明の衝突論を克服するために－
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken/index.html>
 シリア・アラブ共和国における文化遺産保護国際貢献事業
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/bunka/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西山 伸一 (Nishiyama Shin'ichi) (50392551)	中部大学・人文学部・准教授 (33910)	